

日時 二〇一六年二月十七日(土) 午後二時〜

テーマ 詩誌「列島」と関根弘について

詩誌「列島」について

詩誌「列島」は一九五二年(昭和二十七年)三月創刊、一九五五年三月終刊。全十二冊。

発行所は知加書房(東京都千代田区神田神保町1の3) 発行人Ⅱ木島始 編集長Ⅱ関根弘。これに参加した主要な詩人や批評家は、木島始、関根弘、野間宏、井出則雄、瀬木慎一、壺井繁治、浜田知章、井上俊夫、河合俊郎、伊藤信吉、御庄博実、伊藤正斎、菅原克己、黒田喜夫、長谷川龍生……。『世界大百科辞典』第二版の記述によると、〈造形文学〉と〈芸術前衛〉という二つの雑誌の有志が集まったとされているが、これがどういう雑誌かが解らない。さらにこの『大百科』では、おおよそ以下のような説明をしている。

対日講和条約、日米安全保障条約の締結という状況に対応して、社会主義思想と前衛的な詩法と融合をはかると同時に、全国の職場、地域、学校などのサークル詩運動との連帯を推し進めたところに特色がある。戦前のプロレタリア詩やシュルレアリスムを検討する一方、風刺詩、国民詩、サークル詩などについて問題提起をした。

注一 いったいここでなぜ、〈対日講和条約、……〉が引き出されるかの説明が必要だろう。まず、「対日講和条約」とは、第二次世界大戦において、日本が戦ったアメリカ、イギリスなどの連合国との戦争状態を終了させる講和条約で、一九五一年九月八日にサンフランシスコで署名され、一九五二年四月二八日に発効した。それでサンフランシスコ条約とも呼ばれる。これをめぐって日本の国内が左右に分裂した状況を、『大百科』は暗に指しているものと思われる。なぜかという点、まず、当事国は四五カ国だが、中国(共産党政権)はアメリカが国民政府を承認していたため、講和会議に招請されなかった。(中国共産党が国民党との内戦に勝利し、中華人民共和国が成立したのは一九四九年)また、日本は占領下におけるアメリカとの約束により、国民政府と日華平和条約を結んだからだ。また、ソ連は会議に参加していたが、チェコスロバキアやポーランド^{ポーランド}などの衛星国と共に署名しなかった。当時の日本の社会党・共産党などの左翼勢力は、ソ連や中国の社会主義国を平和勢力と規定して反米路線を取っていたが、基本的に「列島」の詩人たちは対日講和条約に反対するソ連、中国の側にいた。ソ連との戦争状態の終結は、一九五六年の日ソ共同宣言まで待たなければならなかった。さらにそれより前、一九五〇年には朝鮮戦争が勃発し、米ソの冷戦状態が深刻化していた。この世界の複雑な政治情勢の中で、当時、ソビエトのスターリン独裁体制がどういうものか、東欧諸国がソ連の厳しい軍事支配下にあることなど、鉄のカーテンに遮られて、日本社会にはよく伝わっていなかった。

注二 《社会主義思想》と《前衛的な詩法との融合》をはかったとして、それは誰の指導理念にあったのか。そういう先験的なものが、前提になった理由? 社会主義リアリズムとの関係?

註三 一九五〇年代のサークル詩運動は、他の時代のサークルの活動や詩と区別されねばならない特殊性がある。その一番大きな特徴は、五〇年代の政治・社会運動と連携（連帯）あるいは強い対応関係をもっていたことである。関根弘がサークル詩の類型化を繰り返し批判しなければならなかった根拠はそこにある。しかし、サークル詩運動といっても、それぞれを区別しなければならぬ特殊性がある。九州の「サークル村」では谷川雁、森崎和江、上野英信、石牟礼道子などが活躍した。東京大田区の下丸子文化集団のサークル詩運動、大阪在日朝鮮人のサークル「ヂンダレ」「カリオン」などが知られている。『国鉄労働者詩集』、『京浜の詩』、『勤労者詩選集』、『詩華集・全通40年』などもサークル詩運動から生まれたものだろう。……研究では思想の科学研究会編『集団・サークルの戦後思想史』（平凡社）、松原新一『幻影のコンミュニオン——サークル村』を検証する（『創言社』など。留意点として、生活記録運動や労働組合の文化活動との関係、社会党や共産党の文化政策との関係等見るべきだろう。詩や文学、思想などの同人誌活動との差異についても）。

関根弘略年譜について（『日本近代文学大辞典』『日本現代文学大事典』参照）

大正九（一九二〇）年一月三一日〜平成六（一九九四）年八月三日。東京浅草に生まれた。昭和七年、向島区第二寺島小学校を卒業すると、すぐに就職、紙器製造業、メリヤス工場を経て、日本電気三田工場に入社した。昭和六年、詩人清水清の詩誌「帰帆」に作品発表。少年詩人として認められる。その後、詩誌「詩戦」「ぼくら」「暖流」などに拠る。さらに昭和十年、詩誌「詩行動」、昭和十五年、雑誌「文化組織」に参加。小野十三郎、岡本潤、秋山清、上村実、青柳優、植村諦、中野秀人、清水清、伊勢八郎らと交流。また、詩誌「詩作」「ラ・ユストロ」「動向」にも参加する。社会は昭和の恐慌期から、軍国主義の擡頭を迎え、また、思想弾圧が激しくなり、雑誌刊行は困難を極める。昭和十四年、木材通信社、日本軍事工業新聞社で働く。戦後は雑誌「総合文化」の編集長となる。「近代文学」「新日本文学」「コスモス」に拠り、詩運動「列島」「現代詩」で活躍。また、夜の会、現在の会、記録芸術の会にも参加し、ルポルタージュ、社会評論、文芸評論、小説など、幅広い分野にわたり、作品を発表する。昭和二十八年七月に詩集『絵の宿題』（建民社）刊行。昭和三〇年六月、野間宏との〈狼論争〉をまとめた詩論集『狼が来た』（書肆ユリイカ）を出す。同じ時期ルポルタージュ『鉄―オモチャの世界』（柏林書房）を刊行。その後、昭和三十二年一月、詩集『死んだ鼠』（飯塚書店）、昭和三四年八月、評論集『水先案内人の眼』（現代思潮社）、詩論集昭和三四年六月、『青春の文学』（三一書房）、昭和三六年、『現代詩入門』昭和三六年、『東大に灯をつける』昭和三八年、『くたばれ独占資本』昭和三八年、詩集『約束したひと』昭和三九年九月、『関根弘詩論集』（思潮社）、昭和四五年五月、『わが新宿』（財界展望新社）、昭和四六年四月、『小説吉原志』（講談社）、昭和四八年五月、戯曲集『夢の落ちた場所』（土曜美術社）、昭和四八年三月、ルポルタージュ『浅草コレクション』（創樹社）、昭和四六年五月、詩集『阿部定』（土曜美術社）。

*ここに記した著作について、可能な限り努力しましたが、すべてを現物で確認できていません。